

平成 26 年度 第 4 回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会議事録

- 1 日 時 平成 27 年 3 月 20 日（金） 16 時 00 分～17 時 30 分
- 2 場 所 静岡市役所 本館 3 階 第 2 会議室
- 3 出席者 （委員）上利会長、川口副会長、入川委員、高岡委員、林委員
（事務局）小泉参与兼文化振興課長、酒井課長補佐兼企画係長、
三浦副主幹
- 4 傍聴者 0 人
- 5 議 題 「静岡市文化振興ビジョン総合評価書について」

6 会議内容

（1）開会：事務局（三浦）

第 4 回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会の開会を宣言する。

委員の過半数以上の出席があるため、会議が成立していること及び傍聴者が 0 人であることを報告する。

今回の議事録署名人を、上利会長、川口副会長に依頼し、両名から承諾を得た。

（2）議事：議題『静岡市文化振興ビジョン総合評価書について』

- ・上利会長：事務局に説明を依頼する。

- ・事務局（酒井）

「静岡市文化振興ビジョン総合評価書（案）」について、3 回目の懇話会にて出された意見の評価書への反映、前回までに配布した資料等の修正等変更箇所について説明を行う。

- ・上利会長：各委員に質問・意見を問う。

- ・川口副会長

この評価書を最終的に作られた後は、どういう使い方をするのか。それぞれの会やヒアリング等をしたところに戻し、やっていることに反映させることが目的ということによいか。

- ・事務局（酒井）

もちろん、関係各館や庁内の関係課、議員等に配布して、今後の文化振興に係る事業に反映させていきたいと考えている。ビジョンの計画期間が 27 年 3 月で終了となることから、こちらについては一区切りとさせていただき、評価検証をしていく中で、課題として出てきたものを次の計画等に活かしていきたい。

- ・入川委員

これは、一般市民も見ることができるのか。

- ・事務局（酒井）

まず、ホームページで公開する。市役所に来ていただく形にはなるが、冊子も情報コーナー等で手に取って見ることができる。冊子の体になるのは、4月になるかもしれないが、委員の皆様からいただいた貴重な意見をこのように反映させて、もう少しきれいな形に製本させていただく。

- ・上利会長

作ったものがどのような意味を持つてくるのか気になるわけで、基本的な目的は、作ったビジョンが終了したので、そのビジョンはどの程度うまくいったのか、足りないものは何なのかということをも反省しつつ、今後の展開に向けてということになる。問題なのは、市民の方、あるいは委員の方、あるいは市役所の方かも知れないが、これを直接読むことができるかどうかということよりも、この中に入れた文言の「今後について」のところに書いてあることについて、この冊子そのものというよりもこれを踏まえた上で、どう皆でやっていくのかということだ。これからの問題について謳われて、書き込まれているということは、これを基にして文化振興課の方を中心として、次の展開に活かされることを望む。

- ・林委員

推進体制のところだが、文化振興財団が実際には事業化をしてやっているが、そのような場合には、いわゆる指定管理者と市が協働してこれを行うようなことが推進体制に入ってきたほうがいいのではないか。あくまで行政が作るものなので、どういうように捉えたらいいのかはわからないが、いわゆる文化振興財団も自分達が指定管理者をとるために、基本理念とか5つの基本方針とかを立ててやっているが、勝手に立てるのでなく、やはり市のこれを受けてそういうものを作っていく必要がある。そういう体制を望むということをも、推進体制の中に入れたほうがいいのではないか。

- ・事務局（酒井）

確かに今の文化振興ビジョンを基に、文化振興財団は理念等を作っているので、常に意識して文化振興を進めているわけだが、今後は、協働体制をより強化して、次の計画を策定にあたっては、推進体制の中で一緒になってということをも明確化していくべきと考える。今でも、事業を考える、いわゆる企画をするのは市であっても、実施するのは文化振興財団という、いわゆるパートナーシップというか、車の両輪のようなものと説明をさせていただいている。

- ・林委員

一生懸命に市のビジョンを受けて、財団も計画を作っているのを見ているので。

- ・上利会長

企画と実施という役割分担があり、財団の方が市のビジョンを受けてということだが、市のビジョンと違うものを感じたり考えたりすることがあれば、逆に意見を言っていくというのが本当の連携になるのではないか。そういう活きた連携が作れるといい。

- 林委員
ただ、下請けだけでなく。
- 上利会長
市の理念を理解せずに指定を受けるというのはいりえない話なので、今の意見をこの中に書き込んだほうがよろしいか。
- 林委員
非常に意識をして頑張っているなので、必要ではないか。
- 上利会長
書き込むところは推進体制でよろしいか。
- 高岡委員
「評価方法について」というところで、何をもって評価基準とするのかということを確認にしていかないと、財団がやっていることについても、評価のしようがないのではないか。
- 事務局（酒井）
それについては、文化振興ビジョンの評価検証を進めていく中で、市としても最大の課題として考えている。ビジョンが作られたのが9年前と古いこともあるが、4月からスタートする総合計画の中でも、事業や施策についても数値的な指標が取り入れられている。現ビジョンでは、やったかやらないかになってしまっているところが残念なところなので、文化は数字では計れない部分が多いと思うが、バランスを考慮し、数値的な指標も組み合わせて、ある程度の指標の目安というかそういうものが計れるものにはしていかなければならない。
- 林委員
実際には、数値的な評価をやっているが、数値的な評価で逆にいいのかと。例えば、30人の募集人員に対して5人しか来なくても、5人は必ずやったのだから100パーセントだという数字はおかしいのではないかというように、今度は数値化そのものが形骸化してしまわないかという問題もあるので、数値の仕方が難しい。かなり数値化してはいるが、実は本当にそうなのかというのをどこで見るかというのが難しい問題だ。
- 上利会長
数値化についての提案ということでよろしいか。
- 高岡委員
数値化も一つの評価になるわけだが、何の数値を取るか、例えば一つの美術展や芸術祭で見たらわからないかもしれないが、長いスパンで見たら、絵を描く人達や展覧会に出品する方が増えているとか、そういうことがわかることがある。各分野分野で、そういう工夫がされていくといいのではないか。今回の評価ではすべて成功したように書いてあるのでその辺はどうなのか。そのほうが事業を継続しやすいのはわかるが、これを成功として考えていいのかということ、自己評価する時にも何かヒントになる係数というものが工夫できないか。

- ・上利会長

そういう基準があったほうが良いということは、皆さんが思うことだが、具体的にどういうイメージを持っているのかを伺いたい。3次総における数値という話があったので、具体的にどういう数値で、何が有効だと皆さんが思われているのかということ、もう少し考えてみたらどうか。
- ・上利会長

難しいところだけれども、今はそこが求められてきていると思う。「とりあえずうまくいきました」というのはそれでいいとは思いますが、いいからそのままでもいいのではなくて、さらにクオリティを高めていけるような基準として何を提案できるかということだと思ふ。その難しい部分について意見を聞かせていただきたい。
- ・高岡委員

例えば演劇でいうと、市民文化会館が一般公募で事業を行ったりしているので、やろうとする人や関わって何かをしている人は増えている。だが、演劇の活動が盛んになっているかということとそうではないというところがある。
- ・上利会長

それは、どういう状態なのか。
- ・高岡委員

やり方が変わってきているということだと思ふ。昔は手弁当で、自分達でそういう場所を作っていたのだが、今は、市民文化会館がお膳立てしてくれているので、特に参加費もなく参加できるため、それならば参加するという人は増えている。
- ・林委員

ところが、そこで展開している中味が気になる。そこがすごく難しい。
- ・上利会長

いろいろと親切にすれば人は集まるが、関わりが薄いというところがあるので数字だけでは計れない。今の総合計画の中で、何か基準のようなものに踏み込んだりしているのか。
- ・事務局（酒井）

総合計画の指標は幅広く、経済や文化の観点、あるいは防災や教育もあり、それぞれがこれがよいのではないかと指標を設定しているため、ケースバイケースになっている。例えば、文化に関する指標を例に挙げれば、それでいいのかどうかという議論はあるが、参加者数、入場者数やアンケートでの満足度のようなものもある。参加した方のアンケートでは偏ってしまうかもしれないので、広く一般の、普段訪れない方を含めた中でのアンケートが有効かもしれないし、一つひとつの事業や施策によって検討しバランスよく取っていかないと行かない。
- ・上利会長

今の話をまとめると、やったやらないというものではなく、それぞれの分野で評価基準となるものは何なのかを、同時に出しながら評価をしていくという

ことがこれから求められているということか。

- ・事務局（酒井）

そのような数値評価的なものを作る際には、毎年評価をするものもあれば、5年後あるいは10年後ということもある。例えば、長期的に10年後の市民の文化度がこれだけ上がったというものもあるし、毎年毎年高めていくものもある。

- ・上利会長

そういう基準を作っている主体は誰になるのか。演劇という立場で、演劇をしている方から見た基準の取り方というのがあるが、数字が形骸化していくという一つの理由は、外から見てしまうということがある。活動している人が一番文化内容を知っているわけで、そういう人達が最も文化として盛んになっているというのをどこで感じているかということ、うまく汲み出していないと、入場者数が何人だといった話になるのではないか。

- ・上利会長

難しいところではあるが、やはり踏み込んだほうがいい。これをここに書き込みますか。

- ・高岡委員

そういう方向でお願いします。

- ・高岡委員

「評価方法について」というところに、そういうことが入ってくるといいのではないか。実際に文化事業をやる中で、そういった工夫を求めていくのも一つだし、事業した方の実はこうなんだという思いがわかれば、数字がよくなくてもなるほどなと思えるのだが。具体的に言えば、去年、市民文化会館でエスパルスを題材にしたミュージカルの2回目の公演があったが、入場者数が少なかった。前後に関わったスタッフの人達は、すごく燃えていたし、いいということだったが、数字を見たら半分しか入っていないため、関わっていないとその良さがわからない。

製作面でのまずさがあったのかはわからないが、文化財団の方がというわけではないが、前後から言うとそこまではどうなのか。クールな見方の方は、いやそこまで変わってないよと言う人もいるし、いろいろな見方がある。ただフェイスブックなどで、それに関わっている人達の情報を見ると、すごくいいように書かれていた。

- ・林委員

見方が偏っているかもしれないが、内容が清水区に集中していて、清水の人でないと共感できない。静岡の人には少しわかりにくい筋立てだった。開催場所が市民文化会館ではなくてマリナートだったら、さぞ大勢来ただろうと思っ見ていた。「静岡」のエスパルスではなく「清水」というようで、周りには方はなんとなくしらけていて難しいなと思った。

- ・高岡委員

エスパルスに取材をして作ったということを行っているので、それはどうし

でもそういうことになる。静岡でも熱心なファンがいたとしても、その気持ち
がそこには反映されていなかったのではないか。

- 林委員

まちづくりがテーマであるのに、結局エスパルスに特化してしまっている。

- 上利会長

今の話は、数字をもって評価するのは一つの基準ではあるが、もっと実質を
表すような基準というものを作っていきべきだということで、数字ではなくて
言語表現でもいいので、何がよかったかということを出すと。ただ、自
分達がいいと思っても、外から見るとどうなのかという意見もあるが、そ
れはまた貴重な意見であって、入場者が少なく自分達はなぜなのかと思っ
ている時には、実は一面的な見方であり、そういう意見がどんどん寄せら
れて、今度やる時にはそういうことも反映しようと思えばクオリティが上
がる。フェイスブックという話が出たが、ネット上の口コミとかもある。そ
ういふものの集約で、いいという人と悪いという人の言葉が同時に出てこ
られるような仕組みがあるといいのではないか。

- 川口副会長

数値化の評価は難しいが、一つだけ可能性があるのは、同じような事業を継
続的にやった時には、その数字というものはある程度の一貫性があるので、
前はこうだった、その次はどうだろうといったような比較ができる。一律で
なく、事業毎に作らなければならないという問題があって、しいて言えば自
主的に、継続事業である場合には、事業評価というか自己評価か、あるい
は外からの評価かはわからないが、そういうものを作りなさいというのは
いいことだ。似たようなことをやれば、去年と比較するというのは当事者
でもできるし、外から参画した人もどうだということが言えるし、その
両方の立場で違った見方ができる。数値があってもいいし、かつ文章だ
けでもいいのではないか。数値化できるものもあるし、どういうものを
そのようなバロメーターにするか。例えば入場者数であるとか、あるいは
数値化できるものもいいのだが、いい悪いという質の問題に対しては、
なかなか数値化は難しい。音楽の事業にしても、やれないということ
はないが、継続してやる時には何らかの検証するにあたり評価があ
ったほうがいいのかというのが事実なので、そこをどうするのか。補助
金を出すときには、ある程度の指標があった方がいいと思うのは事実だ。

- 林委員

先ほどの「GO!!ALL」は、去年のものをパワーアップしてという宣伝ではあ
ったが、なかなかそうはいかなかった。

- 上利会長

補助金を出す時には、逆にセーブすることもある。どこまで評価を高める
のか、どういう結果を出せばよいかということになるが、本当の評価とい
うのは、自分でやっていて自分ではわからないことがあるから、それを
意識化しようというのが本来の目的なので、その評価の仕方によって
補助金に影響があるということをやると、それは本末転倒という気がする。
評価方法と

してマルバツではなくて、もっと実質を組み込めるような評価方法をこれから構築するということが重要なことだ。

- ・入川委員

3 ページの、3、4、5 行目の赤い文字のところは、情報収集についてというところに入っているが、評価という部分にもすぐつながるところなのではないか。市内で活躍する活動団体や個人という場合、誰に聞くのかと言うのも難しいと思うが、そういう方たちの意見が一つの評価に繋がるということも多いにあるのではないか

- ・林委員

かかわっている団体では、事業を行った時は毎回評価をしている。理事という立場の本当に少数の人だが、毎回しっかりとした評価をさせられ、後は一般のアンケートを別に取り替えている。

- ・上利会長

演劇や演奏会をやった後には、自分がやったことに対しみんながどう聞いてくれたのだろうか、今回はうまくいったのだろうかと思う。評価というのは、多分その延長上にある問題だが、今のようにやらされ仕事みたいになってしまうのはどうか。皆で作っていくものについては、自分だけの物の見方ではなくて、他者の見方も入ってこなければいけないので、そういうやり方ならばしんどくはない。

- ・川口副会長

最近では、公演が終わった後に、必ず主催者が参加者に配ったアンケートを回収しているので、外部者がどう思ったかということを中心に活かすことについては、だいたいやっているのではないか。

- ・林委員

私達を書くものは、一般のアンケートと項目が全く別のものだ。

- ・上利会長

それは、企画側としての次の参考にとということですね。

- ・川口副会長

組織として繋がってれば、スムーズにやれるが、自分達の企画でいっぱいだったりすると、そのフォローアップまでいかないかもしれない。このメニューからいうと、余裕がある組織がやっている場合と非常に少ない人数でやっている事業もあるので、それをみな一律でやりなさいというのは酷である。ただし、やるようになってもらいたい。

やり方として、そういうことができるならば、評価の一律なフォーマットというのはなかなか難しいが、やれるというかやった方が望ましいというか、そういう方向性に持っていく。それは何のためにやるのかというのは、事業を行った団体が、今後どう活かすかという情報収集が一番基本だと思う。先ほどの話しのように、推進体制と情報収集は関係している。

- ・上利会長

91 ページの新規事業のところだが、平成 23 年度以降新規事業一覧がなしと

いうのは気になる。新しいことはやらないとも見えるので、この状況を説明していただきたい。

- ・事務局（酒井）

ビジョンを策定してから、毎年度新規事業についても調査をかけており、挙がってきたものを掲載しているが、新規事業がなかったという状況だ。

- ・上利会長

いろいろとやっているから、もうやるべきことは十分ですという話なのだろうが気になった。また、2ページの「市民をどう巻き込んでいくか」という言い方に違和感がある。巻き込む主体と、巻き込まれる側というのは古い言い方で、「一緒に手を携えて」などと修正できないか。

- ・事務局（酒井）

これについては、表現を変更させていただく。

- ・川口副会長

4ページの「文化の範囲について」で、このブラックツーリズムの上のほうはいいが、下の4行目のところに「地域資源として保護や整備をしていくことはできないか」と書いてあるが、読んだ人はそのように思うのか。

3行目と4行目の「それも重要な遺産ではないかという考え方も広くいわれるようになってきているが、地域資源として保護や整備をしていくことはできないか」とあることについては、具体的にはどういうことをイメージするのか。4行目のことは、もし質問されたときに、こういうことを指しているということをお答えできないといけない。地域資源として、そのようなものが既にあるのかどうかを理解している必要がある。

- ・事務局（酒井）

意見として出された時に思ったのは、例えが悪いがアウシュビッツなど、そういうものもいわゆる資源になるのではないか。またそれを大事に残していくということなのではないかと自分の中では捉えていたが、そういうものでよろしいか。

- ・上利会長

前に話題とした時は、戦争の跡や記念館というようなものを、市として整備したほうがいいのではないかという話で、資源という言い方が正しいかどうかというのはあるが、一般の人が読んで、いきなりこの文章だけでどう思われるのか。

- ・林委員

教育委員会の範疇だということだが、平和資料館はいい意味で整備をしていただくとありがたい。

- ・事務局（文化振興課長）

伝馬町の平和資料館については、教育総務課で支援している。教育の面もあるが、平和の観点については、市の全体で連携して支援をしていくことが、今後必要になってくる。

- 川口副会長
「地域資源」という言葉が気になる。
- 上利会長
「地域資源」という言葉を取って、重要な遺産ではないかということで保護等に結びつけられればいいのだが。
- 事務局（酒井）
「地域資源」という言葉を取り、重要な資産ではないかという考え方が広く言われるようになってきているが、そういうものを大事に、あるいは保護できないかというニュアンスでよろしいか。
- 上利会長
「文化の範囲について」というところが1項目取り出されおり、中黒ひとつしかないが、本当はもっとあってもいいのではないか。その下の「今後について」の二つ、三つぐらいが、文化はエンターテイメントうんぬんということであるので、上に入ってもいいのではと思うが、この場で文化の範囲について、もう少し皆さんの意見が出て、ここが豊かになるといいのだがどうか。以前、自然の話をしたが、海や川などについても、文化の基礎としてという話をしたが、こういうものを入れてもいいのではないか。項目が必ずしも燦然と分かれるわけではないので、ひとつでよろしいか。
- 林委員
4ページの二つ目に「市民がやる市民ギャラリー」という表現があるが、「やる」という言い方でなく、もう少し別の言い方がないか。
- 事務局（酒井）
「運営する」と表現を変えさせていただく。
- 高岡委員
「今後について」の三つ目のところの、「若い世代に対して教養的な文化でないアミューズメントの要素を持ったやり方を含めながら、昭和的な文化の良さを理解してもらえらるような関係作りが必要になる」ということは、どういうことを指すのか。「昭和的な文化」というのは何か。
- 上利会長
「昭和的な」ではわかりにくい。話の流れで、確かにこういう言葉が出てきたが。
- 事務局（酒井）
議事録等を確認して、表現を変えるか、あるいは注釈を付けるか等わかりやすくする。
- 上利会長
注釈を入れるのは、実は非常に難しいのではないか。4番に「環境整備について」とあるが、環境というのはどういうことを考えているのか。いくつか中黒のものがあるが、読んでみると前半の4つが施設のことを言っていて、後半が入り口の問題、つまり一般の人達がすっとわかりやすく入れる入口部分をどう作っていくかという議論をしている。全部内容が違うので、例えば推進体制

も環境整備といえど環境整備なわけだし、情報発信もそうだが、場合によっては、二つではっきり項目が違うならば、①を施設の整備、②を「入口の」といったようにしてもいいのではないか。環境とは、どういうことをイメージしているのか。

・事務局（酒井）

環境という言葉自体が幅広いので、上の部分は確かにハード面の施設について言っており、下の方はどちらかというとソフト的な、どれだけ情報を手に入れられるかといったことを言っている。そういったものをひとつの大きくくりで環境整備としてまとめているが、項目を分けさせていただく。

・上利会長

先ほどの部分も、全体に繋がっていると思うが、これは誰がどう見るかという話と、こことここが繋がっているのではないかという話と、あるいはここで入口の話が出て、もっとわかり易くといいながら、実はわかりにくくこの報告書ができていたとか。多分、「昭和的な」もそうだが、ここまで出た議論を拾おうとして、それを忠実にしてしまうことにより、いろいろな意見がばらまかれたような結果になっている。①、②とし、ハードとソフトわけるのがいいか。

・事務局（文化振興課長）

上をハード、下をソフトなどと分けさせていただく。

・上利会長

上手に分けられるならという感じはあるが、同じように推進体制も長いので、本当は項目を分けたほうがいいのだが、上手にできそうならばどうか。

・上利会長

この懇話会は、ここにおられる多くの方の最初の出発点の懇話会としてビジョンを作るということから、だいぶ何年も経ったという気がする。こういうことを踏まえてやってみて、こういうものを作って、目指すべきものが次の段階に入っているのだという気がする。これが、次にどう生きてくるのか、活かせるのか。「今後について」のところの終わりのほうでさりげなく条例があったほうがいいのか、条例になればいいと、次のステップへの橋渡しのような文言が入っていておもしろい。

・高岡委員

文化関係の条例を定めている市というのがありますか。

・事務局（酒井）

第2回目の会議の時に、資料として出している。もっと研究を深め、いいところはどんどん取り入れていきたい。

・高岡委員

個人的に、静岡市がもっとよくなればと思うが、人口も減っていると言われると、こんないいところなのになぜかと思ってしまう。アピール不足等の問題ではなく、やはりもっとよくしていかなければならない。

- ・上利会長

いろいろな街を回っていると、「この街はこういうことを頑張っている」と感じることもあるが、こういう方法もあるのだということを手頃に学ぶにはどうしたらいいか。文化振興課の方が、研修のような形でいろいろなところへ行ってみるとのことなのか。

- ・事務局（酒井）

文化に関することであれば、もちろん先進地ということ学びに行くことは可能だと思うが、どの点を、また何を売りにしているかということによる。

- ・上利会長

そういうことをどんどんやったほうがいいが、市役所の場合だとポジションが変わったりするので、そこが難しい。研修に行って、ここのこういうところがいいというのを課内等で共有できるようにしておけば、人が替わってもいいのではないかと。よその地に行くと、ここはこんなにおもしろいことをいろいろやっているなと思うところがあるが、そういうところを静岡にもうまく反映できたらいい。

- ・事務局（酒井）

先進地視察や、市の職員が全国から集まる研修には積極的に出かけているが、まだまだ足りないということはある。それをどう実現に結び付けていくかというのは次の段階になるが、良さとしてはどんなものがあるか。

- ・上利会長

例えば、看板の作り方ひとつでもいろいろなやり方があり、ここは不便だと思ったりよくできていると思ったりすることがあるが、いろいろなテーマでそういうものを検証できればいいのではないかと。

- ・上利会長：各委員に意見等を問う。

- ・上利会長

以上で意見交換を終了する。

(3) 事務連絡 事務局（酒井）

本日いただいた意見を基に「評価書（案）」を修正し、各委員あて送付するので、ご確認いただきたい。変更点があればメールやファックスでお知らせいただき、最終的に会長に確認をとり「評価書」としてまとめ、印刷やホームページへの掲載を行っていくがよいか。

- ・各委員：了承

- ・文化振興課長：御礼の挨拶

(4) 閉会：事務局（三浦）

以上をもって、第3回静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会を終了する。

本日の審議事項が、以上のとおり相違ないことを証明します。

平成 年 月 日

静岡市文化振興ビジョン評価等懇話会会長

議事録署名人：懇話会委員
